



闇キユア狩り

Hunter of Darkness

GLAMOUR WORKS

ADULT ONLY

「申し訳ありません。本来であれば、この私めが為すべき役割を貴方様にお任せするばかりか、そのような体にしてしまって……」

「いや頭を上げてください。セバスチャンさん。」

「これもプリキュアに縁深き者として、俺が為すべきを為すだけです。それに俺自身がやりたいんですよ。あいつらを助けるために……」

奴らは来た。

プリキュアの力を持つ闇の者——通称『闇キュア』どもが。

かつては闇に取り込まれていたり、闇の力で生み出された存在。

その全てはプリキュアによって倒されたり、プリキュアの力に覚醒するなどして消えたはずだった。

だが奴らは再び現れた。

しかも今までの闇キュアの全てが連携して各地のプリキュアチームへと襲いかかったのだ。

突然の奇襲、そして物量による圧倒。プリキュア達は善戦したものの敗れ、倒され、何処かへと連れ去られた。

そして地球は闇に包まれた……

だが人類は諦めなかった。

かつて四葉財閥が開発し、悪用を恐れ封印した人工コミュニケーションによる擬似プリキュアシステムを復活させ、闇キュアに挑んだのだ。

しかし並のプリキュア程度のパワーしか出せぬ人工プリキュアでは闇キュアの圧倒的なパワーの前に太刀打ちできなかった。

そこで装着者の限定、肉体改造、エネルギー結晶体の消費による瞬間的な出力増加等のピルキルな改造を施した。

更にプリキュアにあるまじき非道なシステムが提案され、喧々諤々の議論の末『もう後がない』という現実論を理由に搭載された。

そして一人の男が適合者として選ばれた。

「くっ！やはりダメか……」

最初の標的はアンラブリーに決定された

——アンラブリー
プリキュアハンター『ファントム』が、キュアラブリーの姿と能力を得たモツ
ラブリーの戦闘力にファントムの技が使えるというのが、選ばれた理由で、
人エプリキュアに新しく付与された能力にとって、この先絶対に必要な要素
を持っているのだ。

「ふふ……もう終わり？ 久しぶりに歯ごたえのある人間なのだから、もっと
楽しませてよ。」

奴は吹き飛ばされた俺の背を踏みつけると、いやらしく笑う。

残念ながら多少強化された程度では、闇キュア相手には荷が重いようだ。
早速切り札を使わねばならない。

奴が俺にとどめを刺そうとした瞬間に俺は反撃にでた。

「起動せよーミラクルライトツッ！」



「なッ!?!」

「ミラクルライト
小さなペンライト状の物体で、点灯させて振ることで一般人の力をプリキユアへと
転送することができる。二本あたりからの転送量は微量ながら、膨大な数を用いる
ことで、過去に何度もプリキユア達の危機を救ってきた。」

「俺のスイツの胸にはこのミラクルライトを転用した
システムが内蔵されている。プリキユア達はしばしば
デコルやラビーズ、プリカードといったアイテムを
収集していた。これらは無から有を生み出し、時には
事象を捻じ曲げることさえ可能にする奇跡の物品。」

「これを科学的に解析し、擬似的な再現を可能にしたの
がミラクルライトジェネレーターである。プリ
プリキユアの残したこれらをエネルギーとして
燃焼させ莫大なパワーを得るのだ。」

「結晶体から一気に放出させた奇跡の力を、ミラクル
ライトのシステムで人工プリキユアへと流しこむ。」

「俺の一撃でアンラブリーは吹き飛び地面に叩きつけ
られていた。だがこの奇跡の力は、わずか数十秒で燃
え尽きてしまう。しかも現状これを使えるのは、ただ一度きりのみ。
しかも切り札を使った以上は、確実に奴を仕留めな
ければ。」



「おげえエエツッ！」

アンラブリーの下腹部に瞬間的に数百トンにも達するパンチが突き刺さる。しかも一発では済まない。立て続けに十数発の乱打を浴びせる。女が上げる声とも思えない悲鳴とともに、アンラブリーの体がガレキにめり込み、のたうち回る。

だがこの程度の打撃で倒せるなどと思っではいけない。プリキュアの肉体とは、それほどに頑丈なのだ。

ミラクルライトの残りが30秒を切る。ほんの十数秒でかまわない。奴が衝撃で行動不能になればよいのだ。



「ミラクル・フィジカル・ロッドー」

奴の動きを止めた。そう確信した瞬間に俺の股間のカバリが外れ、20センチを超える長槍がそり勃つ。素早く下着を剥ぎ取り、足を抑えつけると狙いを定め俺は奴の股間に一撃を打ち込む。

打撃の衝撃から立ち直りかけていた奴は、己の股間に突き刺さった長槍を見て、信じられないという顔をする。

俺の股間の逸物は、体同様に黒光りする素材で覆われていた。これは下手にそのまま挿入した場合腔圧で振じ切られる可能性を考慮した措置であると同時に意思ひとつで勃起や射精をコントロールする改造が施されてもいるのだ。

俺が腰をふるたびにパンチほどではないにしろ、トン単位の衝撃が奴の腔内を暴れ狂う。

先程までとは、違う種類の悲鳴を上げるアンラブリー。

そして長槍の先端が、数度の突撃の末に奴の子宮口をこじ開けるや、子宮に直接射精した。



「プリキュア・プレグナンシー・レイプ！」

何故このような強姦を行うのかといえば、人工プリキュアが本物ではないからだ。本物であれば、光線や衝撃波という形で浄化エネルギーを撃ち出せるが、所詮は作り物である俺ではそこまでの芸当はできない。またそれだけで、奴らを浄化できるほどのパワーもない。そこで自らの体液に浄化エネルギーを乗せて、相手の体内に直接撃ちこむのが、最も効果的な浄化方法なのである。

そして子宮内に撃ちこむことで、
奴らの身体機能を逆手にとれるからだ。

女性という形態をとっている以上、
いかに外部からの攻撃に強くとも
女性特有の生理機能を持たざるをえない。

奴の子宮内に放たれた俺の精子は、奴の卵子に受精すると
そこから奴の肉体に、いわばハッキングを仕掛ける。

受精の結果生まれるのは受精卵ではない。
それは奴の能力とパワーを吸い取り膨張するエネルギー塊。

膨れ上がっていく自分の腹を見て愕然とするアンラブリィ。



「あぎやあッー！」

十分に奴の力を奪ったと判断した俺は、奴の股間に己の拳を振り込む。そのまま臍どころか子宮口すら押し広げ、子宮内にできたエネルギーコアを掴み一気に引きぬく。そしてコアを胸のミラクルライト・ジェネレーターに収めた。

これが計画当時、物議をかもした人工アプリキュアの新たな能力。

妊娠という生理機能を利用して相手の力と能力を奪う技。

闇キュアを犯し、孕ませるたびに俺は強くなるのだ。



「これが封印の鏡か……」

奴の力を奪った俺は、早速その力を試してみた。目の前に等身大の姿見が現れ、その中にアンラブリーが取り込まれる。

これこそが、最初の標的としてコイツが選ばれた理由だ。

拘束や封印の技に長けるアンラブリーの力を得ることは、今後の戦いにも有利に働く。

人工プリキュアの力では、闇キュアを完全に倒しきれぬ以上、封じてしまうしかない。

俺は最初の賭けに勝った……



「どうだ？人間如きに封じられた気分は」

鏡の中では、アンラプリーが弱々しくガラスを叩いていた。やはり人工プリキュアでは、完全に技を再現しきれぬようだ。封印されても意識と体の自由を奪えていない。

俺は、鏡に手を当てるとズブリと中の異空間に沈み込ませ、アンラプリーの頭を驚愕みにして上半身だけを引きずりだした。まるで水に漬けられていたが如くに息を吐き出すアンラプリー。



「どうやら今少し勝る必要があるか」

引きずりだしたアンラプリーを検分してみた。やはり完全に意識を奪うに至ってはいない。この先下手に封印から抜けだされても困る。

コイツの体力をさらに奪う必要があった。

乳房を捻り上げると悲鳴を上げるアンラプリー！

だがこれはあくまで刺激に反応してるにすぎない。数多の人々を犠牲にしてきたコイツに同情などする気は毛頭ないが、効果の無い拷問を続けるほど暇でもない。どうしたものかと考えこむ。





「ヒイッッ！」

ひとつ手を思いついた。

一端、奴を鏡に戻すと前後を反転させ
尻の穴に指を突っ込むと鉤縄のように引っ掛け、
そのまま尻から引きずり出す。

鏡の中から奴の悲鳴が聞こえるが、勿論そんなことにかまいはしない。
下半身だけを鏡から出させると、俺は再び股間のカバIIを開いた。



「やめでえー!い、いやあッー!」

俺はアンラブリーの肛門に股間の長槍を突き刺すとすぐさま射精した。

人エプリキュアに改造された今の俺は、性的興奮とは無縁に意思ひとつで勃起も射精もコントロールしている。

微弱とはいえ浄化エネルギーを持った俺の精液が、アンラブリーの体内で暴れ狂う。人エプリキュアの力で行う射精は、高圧放水銃のようなものだ。俺はこの先、普通の人間と愛しあうことなど出来はしないだろう。

俺が射精するたびにアンラブリーの肛門の結合部からは、浄化の光が漏れ出る。鏡の向こうではアンラブリーが脂汗を浮かべ、のたうちまわっていた。

プリキュアの封印技というのは対象に多幸感を与えると聞く。苦悶と快楽の混ざった表情を浮かべるアンラブリーを見るに、思った通り、かなり効果的なようだ。



「あ……あア……」

俺はアンラブリーが動かなくなるまで、
奴の尻を犯し精液を注ぎ込み続けた。

尻から長槍を引き抜くと、それまで小刻みに震えていた
奴の尻がぶるりと一際震えると肛門から噴水のように
精液が噴き出す。

体内を快楽で灼き尽くされたアンラブリーは二度と
戦うことはできないだろう。

——アンラブリー討伐完了。

「くっ……」

空中には、四肢を拘束されたトワイライトが磔にされている。

トワイライト
デイスダークのプリンセス。本物はホープキングダム女王トワで洗脳が解けたことによりトワイライトという人格は消滅した。

つまり今ここにいるのは、在りし日のトワイライトを写しとった何者かが作り上げた虚像のようなものなのだろう。

闇の力はしばしばこういった存在を作り出す。





「屈辱なのだわ。ブラックプリンスにさえなれば……」

「させるかよ。相手が全力を出せないように封じるのは基本だろうが」

「この卑怯者！」

生き残った人類側の監視網を駆使し、次のターゲットであるトワイライトの居場所を突き止めた俺は、奇襲に成功した。奴を選んだ理由はブラックプリンスに変身させさせなければトワイライト自身の戦闘力はさほどではないからだ。

しかも過去の記録から、奴が変身するのは戦闘に入ってからと判明している。案外ブラックプリンスの姿を嫌っているのかもしれない。

俺が奴の乳房を掴み掴み上げると、なんとか逃れようと身を振るがファントムの技のコピーである拘束具はどうにか機能しているようだ。

屈辱と羞恥に身を震わせるトワイライト。

なにしろ、こちらは完全な技のコピーさえできないのだ。いちいち相手に本気を出すのを許していたら、命がいくつあっても足りない。



「ぎゃあアアッー！」

いつまでトワイライトの動きを封じてる拘束具が保つかわからない。さっさと済ませてしまうことにする。

俺は奴の帯留めに手をかけると一気に引きずり下ろしてトワイライトの服を破り捨てる。

これまで数じれぬ悪逆な行為に耽っていた闇のプリンセスには、今度は自分が暴虐の贄となることを思い知ってもらおう。



「アインツームンマー」

俺はミラクル・フィジカル・ロッドを取り出すと
アンラブリル同様にとワイライトの股間を貫く。

変身前ではあるが、やはり闇キュア。
俺が突き上げるたびに悲鳴を上げ乳房を激しく揺らすも
その肉体が壊れることはないようだ。

だが、さすがに子宮口をこじ開けるのは容易かった。
あっという間に子宮へと侵入したロッドの先端から
とワイライトの胎内に精液が撃ち込まれる。
その衝撃で、身を仰け反らせ悶絶するとワイライト。



「な、なんですかの!?!」

トワイライトには気絶などという贅沢を味わう暇はなかった。

奴の胎内で受精した俺の精子は、すぐさま侵食を開始。妊娠という本来女体が備えている機能を利用したこの技はトワイライトから胎児が母体から栄養を授かるなどという神々しさもなく、奴からその力と技を奪い取っていった。

醜く膨れ上がっていく己の腹部をわなわなと見つめるしかないトワイライト。

それは気高さも、尊さも、麗しさの一片すらない蹂躞劇。

闇の王女は咽び泣いた。



「アギヤアああッ！」

およそプリンセスらしい高貴さもない絶叫をあげるトワイライト。
いきなり子宮に拳を突っ込まれれば誰でもそうであろうが。

俺は奴の胎内からコアを一気に引き抜く。
これによりブラックプリンセスの二段変身能力を手に入れた。
もはや並の闇キュアにそうそう遅れをとることはあるまい。

これからの戦いを有利にできる力を得た俺は、痙攣を繰り返す
トワイライトを見て酷薄な笑みを浮かべたのだった。

「こんな格好……酷い……」

トワイライトを封印してみると案の定、
わずかながら力を残してようだったので
アンラブリィ同様に処置をすることにした。

股間だけを外に出すようにして引きずり出す。
ある程度突きだしてないと腰を振りにくいので
さらに引っ張るとつられて乳房も先端だけ
顔を覗かせた。

まるで便器のようだと感想を口にする
鏡の向こうではよほど屈辱だったのか
トワイライトが顔を歪めている。



「アナイミィ〜アナイミィ〜」

どうやらこのポーズで姦られるのがよほど嫌なのか
腰を突き上げるたびにトワイライトは泣きじゃくり
顔をイヤイヤと振っている。
だが俺が射精して体内に精液による浄化を行うと、
そのたびにびくびくと痙攣して絶頂を迎えている
のが手に取るようにわかる。



「あー……あー……あー……」

体内を精液で満たされぐったりとなったトワイライト。
俺はロッドをトワイライトの肛門から引き抜くと
すぐさま肛門から精液が噴き出した。

締りのない尻だと罵ると、うっすらと目を開けた

トワイライトは、どうにか肛門を締めようとする。
だがわずかに肛門がひくつくだけで、白い噴流が
止まることはなかった。

やがてがっくりとうなだれるトワイライト。

どうやら体力を削ったのみならず
心もへし折ったようだった。





[.....]

心も体も蹂躪されたトワイライトは、
力なくガラス面にすがりついている。
その姿だけなら、まさに囚われの姫君である。

だがコイツのしてきたことを思い返せば、
そんな感傷など冒瀆ですらある。

俺はトワイライトに背を向けると次の
闇キョアを狩るために歩みだした。

——トワイライト討伐完了

「うわああああッー」

次の標的は、レジーナだ。

レジーナ
キンググジコチュウの娘と称する少女。
その正体は、トランプ王国女王アンの魂が分割されて
生みだされた。キュアエリスこと円亜久里の魂の双子。
本物は、ドキドキチームと共闘して、闇キュアに立ち
向かったことが確認されており、このレジーナは、
何者かに生みだされた闇の者と思われる。

こいつの力の源は、神器ミラクルドラゴングレイブで、
奇襲によって、それを取り上げてしまえば後は簡単な
ものだった。

さすがに敵わないと判断したのか、飛んで逃げようと
するが、足を掴み引きずり下ろし二、三度地面に叩き
つけるとおとなしくなった。





「きゃッ！なにをするのよ！この変態！」

こいつは、他の闇キュアと違い、その力が外部に神器という形で顕現している。わざわざ孕ませなくても封印できるだろう。

……とはいえ、このポリュームのある服は邪魔だな。服を破り捨てるとレジーナは妙に可愛らしい悲鳴を上げて俺を罵った。

普通の人間なら、地面に叩きつけられたら肉塊になっただけで、こんな悪態など吐けるわけなからうが。



「うぎゅう」

おかしい……封印の鏡を出現させたが、レジーナを中に封印できない。

鏡に押し付けられたレジーナが、顔を歪めてジタバタしているのを無視して俺は考える。

そういえば……コイツの情報を読んだ時に覚えた違和感を思い出す。

コイツは、正確にはプリキュアではないのだ。

「痛ッ！痛いよおッ！」

俺の不完全なコピー技では、封印対象が『プリキュア』である必要がある。

だがレジーナは、その力こそプリキュア並ではあっても『プリキュア』ではない。

しかし、であるならば何故コイツは、闇キュアとして活動しているのか。今までだってレジーナのように力を持った女幹部はいたというのに。何故コイツだけが、闇キュアに混じり存在しているのか。

俺はひとつの仮説を立てるとレジーナを犯すことにした。

尻を掴み、奴の尻を持ち上げると、その小さな割れ目にミラクル・フィジカル・ロッドを挿し込んだ。



「あッ！アッ！うわあッ！」

レジーナの子宮に直接精液を叩き込み
即座に受精させる。

だが、今回は力を奪うわけではない。
というか、奪うだけの力はレジーナに
残っていないのだ。

レジーナの子宮にできたコアに対し、
ミラクルライトの力を使って、変身
出来る程度のパワーを注ぎ込むのだ。

L！O！V！E！

精液に乗せる要領で、レジーナの胎内に
段階的に変身エネルギーを送り込むと
そのたびにレジーナの腹が膨張していく。



レジーナの体が光り輝く。
するとその体は封印の鏡へ
ずぶりと沈み込んだ。
思わずレジーナの腰を掴んで
支える。

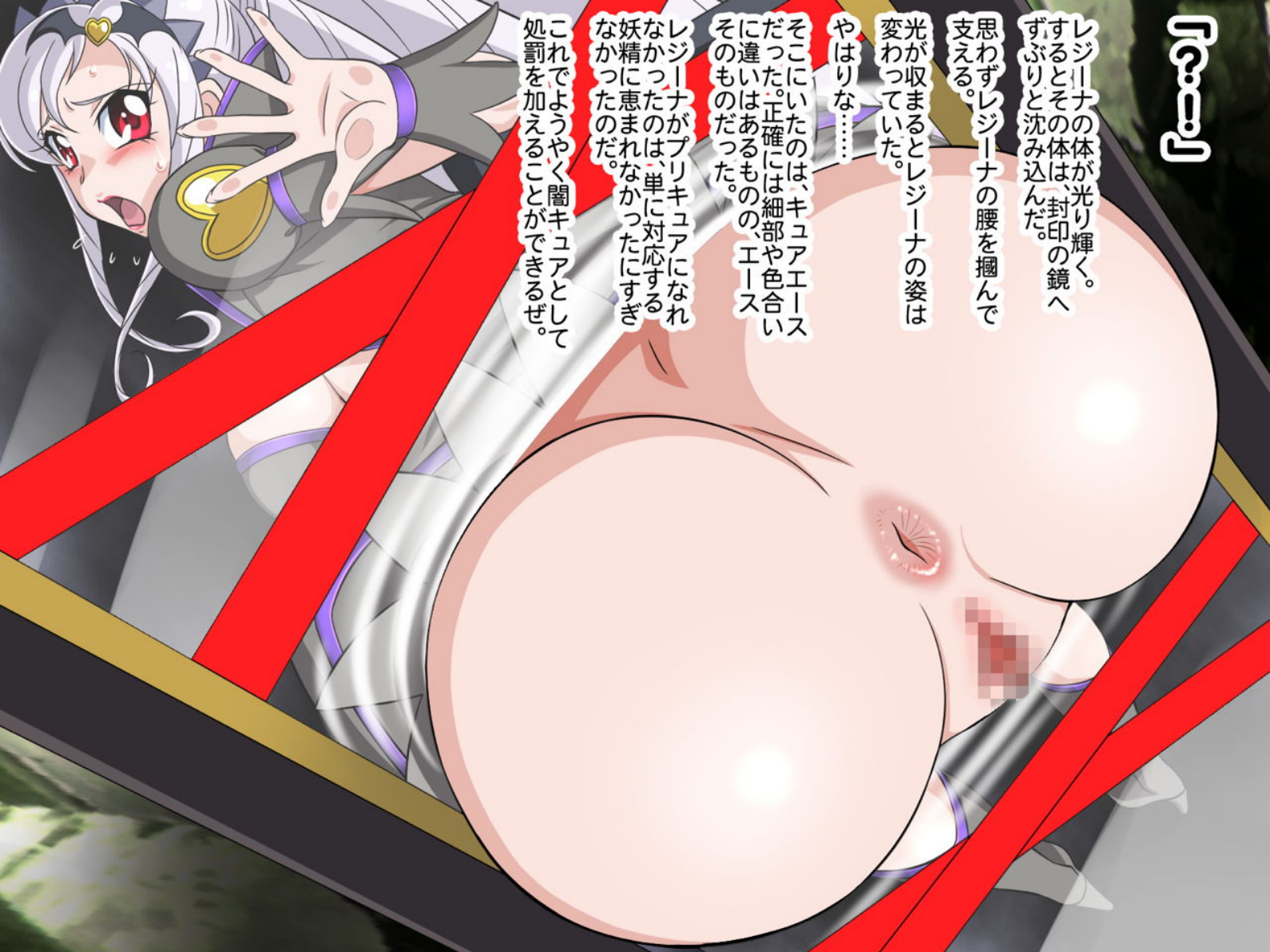
光が収まるとレジーナの姿は
変わっていた。

やはりな……

そこにいたのは、キュアエース
だった。正確には細部や色合い
に違いはあるものの、エース
そのものだった。

レジーナがプリキュアになれ
なかつたのは、単に対応する
妖精に恵まれなかつたにすぎ
なかつたのだ。

これでようやく闇キュアとして
処罰を加えることができるぜ。



「どうだ？プリキュアになった気分は。お前のオリジナルでさえ出来なかったことだ。嬉しいだろ？くくっ…では名をつけてやろう…お前の名は、キュアジョーカーだ！」

俺は再びロッドを構えるとレジーナ改め、キュアジョーカーの尻を掴み、その肛門を貫いた。

精液をキュアジョーカーの直腸に撃ちこみ、浄化エネルギーで奴の体内を灼く。

射精するたびに奴は悲鳴をあげ泣き叫ぶが、お前が今までに苦しめた人々のことを思えば、この程度では温すぎるくらいだ。

せいぜい己の罪を悔いてイクがいい。



「はア……はあ……」

動かなくなったキュアジョーカーの尻穴から溢れた精液が、浄化エネルギーの残滓を纏わせたまま周囲に飛び散る。



「出してー出してよお……」

しばらくするとキュアジョーカーは、レジーナの姿に戻った。こんなところまでキュアエリスと同じということらしい。それに一度中に封じてしまえば、形態が変わっても問題無いようだ。力を奪ったわりに妙に元気ではあるが、自力で変身できぬ以上脱出するだけの力はあるまい。神器も取り上げたしな。

——レジーナ討伐完了。





「ファンタね？ここ最近、私たち闇のプリキュアを犯してまわっているという変態は。」

「バッドエンドプリキュア——」

「いま俺を取り囲んでいる少女達は、そう呼ばれている。大抵の場合、単独で発生する闇キュアの中では珍しくチームで行動する連中だ。」

「こいつらを除けば、集団で活動しているのはダークプリキュア五人衆くらいなものだ。」

「……しかし、いきなり初対面の変態呼ばわりとは失礼な連中だな。」

「なんやその格好。カッコイイと思つとるんか？」
「マスクなんか被つてキモいよ！」
「女を襲つて犯すようなクズが！」
「まったく人間というのは醜いですね」

……うぜえ。
姦しく騒ぐバッドエンドプリキア達にイラツと
きた俺は、手っ取り早くケリをつけると決めた。
ちよつと新しい力での試し腹…ではなく、試し切り
をしたかと思つていたところだ。

俺は携えたミラクルドラゴングレイブを掲げる。
さすがに武器を手にした俺を見てバッドエンド達
も口を閉ざし、身構えた。

だが俺はそんな奴らを見殺して手にした槍に意識
を集中する。

古来、槍は艶笑譚などで、男性器の隠喩として用い
られることがある。その故事にならう、これを名付
けよう。

プリンセス・キー「デイルド」

トワイライトの力で、その姿を変えていくミラクル
ドラゴングレイブ
やがて、それは漆黒の鍵となった。

俺は鍵を胸に差し込み、その力を解放する。

「モード・エレガントオツ！」

俺の股間から、普段の倍はありそうな長さ太さの
黒光りする凶器が脈打ちながら跳ね上がる。

それはまさしく長槍であった。



「きゃあぁッー!」

俺の股間に黒々と屹立した長槍から、機関銃のような勢いで真っ白い浄化の力が迸る。

白き奔流はバッドエンド達に襲いかかり、その女体を乱打して次々と打ち倒していく。

複製品の紛い物とはいえ、仮にも神器を名乗る力。通常では考えられないほどの威力である。

……まあいい方を変えれば、クソ生意気なメスどもにヤバイクスリでガチガチに勃起したチンポを突きつけ、いっばいぶっかけて黙らせたのだが。

うん。ただの変態だ。コレ。

「ニーサン、アンタ正義の味方なんやろ？
女にこんな酷いことしていいと思っとるんか！」

アンラブリー、トワイライト、レジーナの力を取り込んだ俺は
それまでとは比べ物にならない程の力を得た。

もはや並の闇キュアなど鎧袖一触である。

バッドエンドプリキュアの5人を蹴散らした俺は、
封印の鏡を出すも倒れた奴らを次々と放り込む。

俺の浄化エネルギー入りザーメンを浴びたコイツ
らは一撃で戦闘力を奪われ、腰でも抜けたのか
逃げることもできずにもがくだけだ。

それでも体力は残っているのか、鏡の縁に手をかけ
なんとか封印されまいと最後の抵抗をしている。

やはりとどめを刺す必要があるようだ。

まずはバッドエンドサニーを封印する。

なにやら喚き立てているようだが、
俺は正義の味方なんかじゃない。

俺は復讐者だ。
お前たち闇キュアを犯し翳り滅ぼす者だ。



「ホントに犯す気が!!?う、うちが悪かった!」
堪忍してえや?な!?!」

威勢のいい啖呵を切っていたバッドエンド
サニーではあったが、いざ股間に長槍をあて
がわれると、焦った様子が猫撫で声に変わる。

いまさら命乞いとは……
俺は鼻で笑うと返事の代わりにサニーの股間
に腰を深く突き挿れた。

いまだモードエレガントの余韻が残るのか、
脈動に震える我が長槍がバッドエンドサニー
の肉裂を引き裂く。
バッドエンドサニーの悲鳴が響き渡った。



「ビツッ！うちのお腹が……アァアッ！」

一撃でバッドエンドサニーの子宮口を貫いてしまった。
今少し苦しくてやりたかったが仕方ない。
その分、浄化エネルギー入りの精液を多めになるよう
意識して射精をする。受精のみならず子宮そのものを
多幸感をもたせよう。快感で焼き尽くされバッドエンド
サニーの肉体は激しく痙攣を繰り返した。
そして始まる腹部の急激な膨張。
バッドエンドサニーは、呆然とそれを見つめるだけで
あった……



「うぶッ！ぐギイイッ！」

俺の拳がバッドエンドサニーの膣を押し広げ、子宮へと振り込む。苦悶の表情を浮かべたバッドエンドサニーは、激痛に悶え苦しみ、俺はわざと拳を捻って柔肉を抉る。バッドエンドサニーは、その度に豚のような悲鳴を上げた。お前が、今まで多くの人々に与えた苦しみはこんなものじゃない。これから、その力を奪いとりお前自身を焼き尽くしてやる。俺は胎内にできたエネルギーコアを掴むと乱暴に引きぬいた。



「アツ熱ツ！熱いイイイツ！」

バッドエンドサニーの悲鳴は絶えることなく続いた。

バッドエンドプリキュア達の技には特徴がある。

リィダーのバッドエンドハッピーを除くとモデルと
なったプリキュア同様、技に「属性」を持っているのだ。

バッドエンドサニーは、「太陽」、そしてそこから派生
する「熱」だ。

俺はコイツの尻穴を犯しつつ、早速奪い取った力を使う。
直腸に放たれた精液は、途轍もない勢いでコイツの体内
を遡り、浄化エネルギーで灼く。

さらに今回は、コイツの属性「熱」が加わり、文字通り
バッドエンドサニーを「炎」として焼きつくした。



「……うち……もう……アカン……」

バッドエンドサニーの肛門から、浄化エネルギー入りの精液が、いまだ熱をもったま噴き上がる。

口元はだらしなく弛緩し、目は虚ろとなったバッドエンドサニーは、完全に抵抗する力を失ったようだ。

俺がバッドエンドサニーを押すと、ずぶずぶと鏡の中に沈んでいく。

……まずはひとり。



「動けないよ〜こんな格好恥ずかしいよお」

次はバッドエンドピースである。

なにやら、あざとく振舞っているが股間丸出しで身をくねらせ、誘っているつもりなのであろうか。

それとも、油断するとも思われているのか。

舐められたものだ。生憎だが、改造された俺には、もう普通の欲望などない。

闇キユア達を犯したところで、性的快感など微塵も感じない。

俺の望みは、お前たちを倒し、あの娘を取り戻すことだけだ。

さあ、貴様の浅知恵など無意味であることを思い知らせてやる……!!



「バッドエンド……そんなイキナリ……？」

バッドエンドピースの三文芝居につきあう気など毛頭ない。

白々しく振る尻を抑えつけると、俺は股間の長槍をぶち込む。

ミチミチつと限界まで広がる肉裂。

俺は、ゆっくりと腰を落とし、だが確実に長槍を沈めていく。

バッドエンドピースは激痛に悲鳴をあげ、今度は逃れるために腰を振る。が、逃げられるはずもない。

そして長槍の先端が子宮口に突き当たる……



「んぎゅんぐんーんー」

我が長槍がバッドエンドピースの子宮口を貫く。
歯を食いしばり激痛に悲鳴を上げるバッドエン
ドピース。

どうやらコイツは、他の閻キュアより膣が短い
ようだ。まだまだ長槍に余裕があるので、更に
深く挿しこむ。先端が子宮の壁に突き当たり、
子宮そのものを押し上げるにいたって、俺は
ようやく射精をする。

すぐさまバッドエンドピースの胎内では、受精
が行われ、腹部が急激に膨張を始める。

膣を裂かれんばかりの激痛に、閻の力を吸われ
る脱力感、内蔵を押しつぶさんと強まる膨満感。

もはやバッドエンドピースに小細工を弄する
余裕はなかった。



「ぶぎやアあッ！ゆ、許してヒー！許してええええええ！」

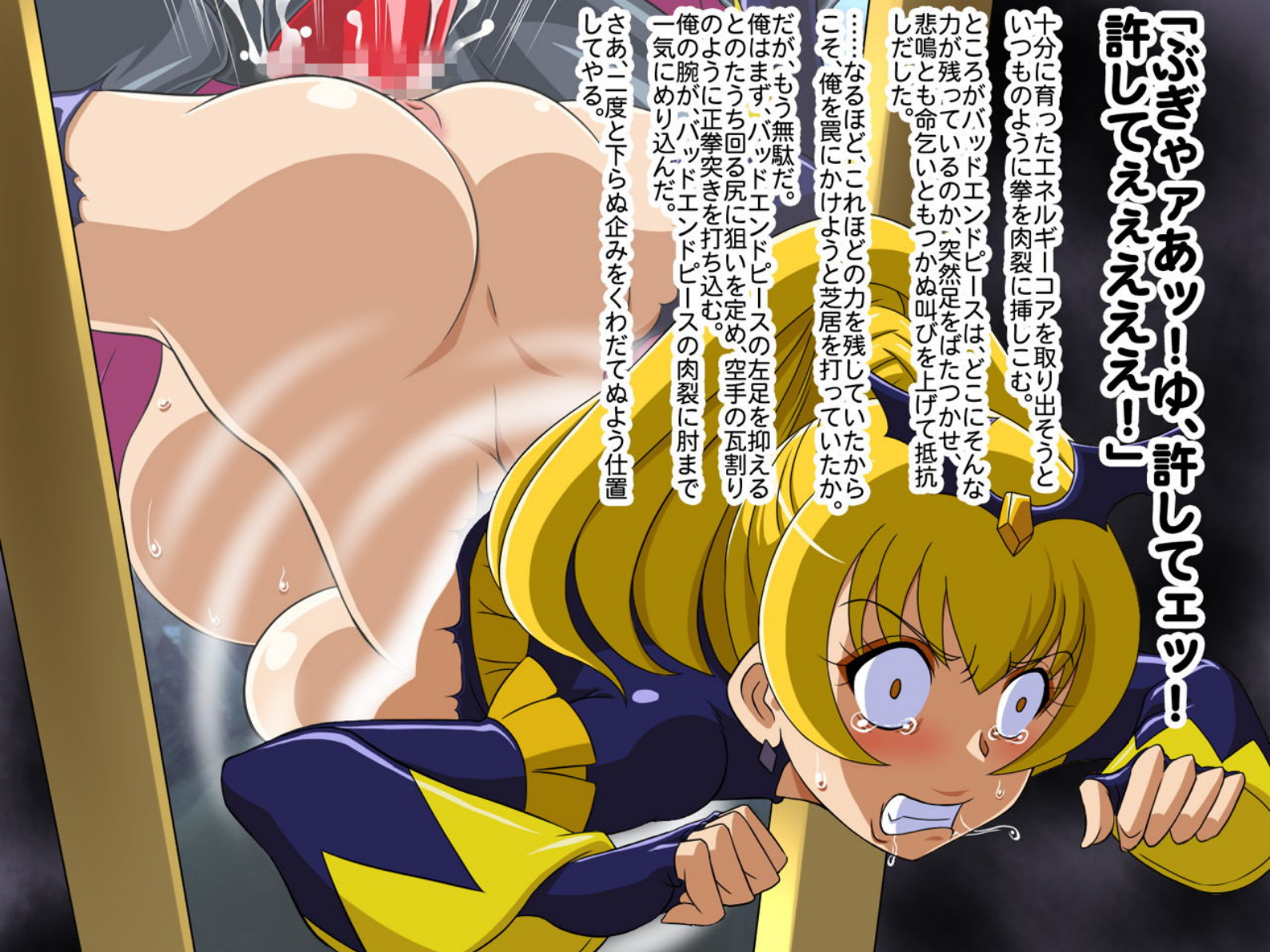
十分に育ったエネルギーコアを取り出そうと
いつものように拳を肉裂に挿しこむ。

ところがバッドエンドピースは、どこにそんな
力が残っているのか、突然足をばたつかせ、
悲鳴とも命乞いともつかぬ叫びを上げて抵抗
しました。

……なるほど、これほどの力を残していたから
こそ、俺を尻にかけようと芝居を打っていたか。

だが、もう無駄だ。
俺はまず、バッドエンドピースの左足を抑える
とのたうち回る尻に狙いを定め、空手の瓦割り
のように正拳突きを打ち込む。
俺の腕が、バッドエンドピースの肉裂に肘まで
一気にめり込んだ。

さあ、二度と下らぬ企みをくわだてぬよう仕置
してやる。



「あがががッ！ゆるじでえエッ！ゆるじでぐださいイイッ！」

バッドエンドピースの属性は「雷」つまりは電気だ。

俺は奪ったばかりのバッドエンドピースの力、すなわち電撃を纏わせた精液を直腸に放つ。

高圧放水銃のような勢いで、精液がバッドエンドピースのはらわたを抉り、駆け巡る。さらに仕込まれた高圧電流が内蔵全体を灼く。

バッドエンドピースは、体全体を激しく痙攣させながらも命乞いを絶叫する。

まだそんなことが言える余裕があるのか。お前は今までどれだけの命乞いをした人々を踏みにじってきたか忘れたのか。

俺はさらに電撃の出力を上げた。



「ぐほッげぼッーオオう…!」

いまさら命乞いなどという、ふざけたことができない
なるまで、俺はバッドエンドピースの尻を犯しぬいた。
ぴくぴくと痙攣するだけになったバッドエンドピース
の尻穴から、ようやく、長槍を引き抜く。

ぽっかりと空いた肛門からは、まずは焦げ臭い煙が立ち
昇ると次に浄化エネルギーの込められた精液が、噴水の
ように吹き上がる。
鏡の中では、ゲボゲボとえずきながら、口からも精液を
吐き出すバッドエンドピース。

今までで最大量の射精をして、ようやく仕留めた。
バッドエンドピースは、今や精液のたつぷり詰まった
肉袋と化し、前後の穴から精液を吐き出し続けていた。



「クソッ！笑うなあ！……」

さて次は……と来てみれば、鏡から尻が突き出ていた。

中を覗いてみるとバッドエンドマーチが、歯を食いしばり、わずかに突き出した指を鏡の縁にかけて、必死に体を支えている。

どうやら先程、鏡の中に放り込んだ時にもんどりうって、こんな格好になったようだ。

下手に体勢を変えようとすると鏡の中に沈み込むため、動くに動けないといったところなのだろう。

封じられまいと本人は必死なのだが、思わず笑ってしまう。



「ズーンっ、こんなもの……！」

マヌケな情景に笑ってしまったが、おあつらえ向きなポーズで
いてくれるのだ。さっさと姦っってしまうことにする。

……ところが、これが意外なほどに難物だった。

残った力を股間に集中したバッドエンドマーチの肉裂は、俺の
長槍ですら苦勞するほどの抵抗を示したのだ。

ねっとり包み込むまん肉でありながら、侵入してくる肉棒を
阻む肉壁として容易な前進を許さない。

子宮口を捉えるために俺は腰を振り、長槍を突き入れる。
それだけでトン単位の衝撃が発生し、底響く打撃音が発生。
だがそれを迎え撃つバッドエンドマーチの肉裂も負けていない。

俺たちの周囲では、音だけ聞けば物凄い格闘戦の最中でもある
かのような衝撃波と打撃音が絶え間なく響く……が、
やっつてはセックスである。

これが生身の肉棒であれば、バッドエンドマーチのマン力で、
どうの昔に振じ切られていたであろう。

だがこんな事態も予測してあった人工プリキュアの防護能力
はこの圧力によく耐え、少しづつではあるが、その硬い防御
を突破しつつあった。



「アァァァアァアァアァアァあぁぁぁーッ！」

バッドエンドマーチは、最後まで抵抗をやめなかった。
たいした根性ではあるが、そんなことで許すはずもない。
激闘の末に遂に子宮口を捉えた俺は、最後の一撃を放つ。
長槍の先端に子宮口を押し広げられる感触を受けて
バッドエンドマーチの口から叫びが上がる。
子宮内に突入した長槍から精液が放たれた。

膨れ上がるこの腹を目にして、バッドエンドマーチの
双眸が絶望に見開かれる。
勝った。



「おごおオオオーツ！」

ようやくのことでバッドエンドマーチを孕ませた。もちろんここで終わりではない。奴の力を奪わねば。

先程のように抵抗されることを考え、俺は一步引くと腰を落とし構え、慎重に狙いを定めた。

気合いとともに全力でバッドエンドマーチの股間へと拳を叩き込む。

思った以上にすんなりと拳がめり込む。

悶絶し、絶叫するバッドエンドマーチの膣肉の感触から、どうやら孕んだ時点で抵抗する気を失ったようだった。

さあ、エネルギーコアを引きずりだしてやる。



「も、もうやめてくれ……
大人しく封じられるから……」

遂にバッドエンドマーチの力を奪った。
当然その後は「尻穴を犯し、より念入りに体力を削る。」

バッドエンドマーチの属性は「風」そこから派生するのは「振動」だ。
風の力を纏わせた精液が、バッドエンドマーチの体内を荒れ狂う。

浄化エネルギーによる多幸感の快楽とは別に、内蔵全体を揺さぶる
衝撃にバッドエンドマーチは泣きじゃくって命乞いをし始めた。



犯され、孕まされ、嬲られたことで、すっかり心を折られたようだ。

だが、お前が今までどれだけの人間を苦しめたか忘れたなどとは言わさん。

苦しんで苦しんで苦しんでから封じられる。

「あ……あア……」

バッドエンドマーチの尻穴からは、だらしなく浄化エネルギー入りの精液が溢れだす。

正面から叩き潰され、侮った相手に無様な姿を晒す屈辱にその瞳は絶望に染まっていた。

お前たち闇キュアには、そんな表情がお似合いだ。



「こんな無様な姿……ビューティの名を汚す万死に値する鬼畜の所業！ あなたは絶対に許しません！」

鏡に半身を沈み込ませたバッドエンドビューティが怒りの声を上げるもの知ったことではない。

それに身動きもろくに出来ぬというのに大事な部分を敵に晒したまま、凄むその姿は滑稽というしかない。

バッドエンドセクシーとも改名したらどうだ。



「ビイツ！やめなさい！今やめれば、少しは慈悲をかけて…あ、あげても…アアツ！」

身の程をわきまえぬ高慢ちな罵詈雑言を繰り返すバッドエンドビューティ。

まったく、これのどこが美しいのやら。

いい加減、鬱陶しくなってきたので、黙らせることにしよう。

俺は、バッドエンドビューティの肉裂に我が長槍をあてがうと、一気に貫いた。

悲鳴を上げ、歯を食いしばって苦痛と純潔を穢された屈辱に耐えるバッドエンドビューティ。だがまだこれからだ。

一発で子宮口までは届かせない。バッドエンドサニーの時のように、すぐに終わってはつまらないからな。

コイツの勘違いした美意識で、どれだけの人々が苦しめられたことか。

今のオマエは、人間如きに扱われるだけの肉袋だと教えてやる……



「アッあぐあッ!わ、私の体に何をした
のです!?!?お、お腹が!さ、裂けるッ!」

まずは、わざと子宮口を貫かずにバッドエンド
ビューティの女の部分を徹底的に責めたてた。

小出しに出した精液をバッドエンドビューティ
の膣内に塗りたくり、その中に含まれた浄化
エネルギーが、性器まわりだけに快感を生じさ
せる。

下等な人間に犯されているというのに、性的
快感を感じてしまっていると勘違いさせる。

見事に俺の策に嵌まったバッドエンドビュー
ティは、感じていることを俺に悟らせまいと
顔を背け声を押し殺しているが、赤く爛れた
肉襖、物欲しそうにひくつく肛門、震える尻
荒い息遣いでモロバレである。

そうしてわざわざ気分を盛り上げてやり、
絶頂を迎えようと膣肉の締め付けが一段と
キツくなった瞬間、俺は奴の子宮口をぶちぬ
いた。

射精、受精、孕み腹の急激な膨張とお決まり
の過程を一気に叩きつける。

バッドエンドビューティは、事態の変化に
ついていけず、完全に泡を食っていた。



「うげえエエーッ! やめ、やめ、やべでッ!」
やべなざイイイッ!

バッドエンドビューティの股間に拳をめり込ませ、ズブズブと肉襲をかき分けていく。

一撃で貫くのではなく、ゆっくりと拳を捻りながら少しずつ子宮口へと進ませる。

バッドエンドビューティは、激痛に白目を向き、全身を痙攣させつつも、ろれつの回らない口調で俺を制止させようと叫ぶ。

この期に及んでも、命令口調を崩さないのだから呆れたものだ。

雌豚は豚らしくブヒブヒ啼いてればいいものを。

遂に子宮口に届いた俺の拳が、肉穴を広げるやエネルギーコアを掴む。

これを抜き取ればオマエは、本当にただの雌豚だ。



「どうこれくらいのことまで！あー！？」
ぞ、そんなッ！卑怯ですッ！」

バッドエンドビューティの高慢ちきぶりは、筋金入りだった。プリキユアとしての戦う力の大半を奪われても、屈服する気などないとばかりに罵詈雑言を投げつけてくる。

いいだろう。その根性が、どこまで続くか、つきあってやるぜ。

まずは、体力をより奪うべく、いつも通りに尻穴を犯す。排泄器官を男に犯されるといって、おぞましさに顔を歪めるバッドエンドビューティ。

まず一発目の射精には、バッドエンドビューティから奪った属性「氷」を纏わせる。

そして冷気が全身を巡ったところで、「一発目にはバッドエンドサニの力「太陽」を纏わせて体内を解凍するかのようにして灼く。

それまでの周囲の様子から、自分の属性で辨られると覚悟していたバッドエンドビューティも、まさか仲間の力を使われると思わなかったよう、悲鳴も一際高く泣き喚く。

続けて「雷」「風」を放つ。はらわたを雷に焼かれ、暴風にかき回され、意識が飛びかけたところに再び「氷」でクールダウンさせる。

そして「太陽」もつかな？



「わ、私の負けです……愚かなこの雌豚を
ど、どうかお許しください……」

遂にバッドエンドビューティは屈服した。
さすがに四属性を連環させた肛門嬲りに
耐えられなくなったのだ。

単なる苦痛であれば、決して屈することは
なかったろう。だが、浄化エネルギーのもたらす多幸福感は、
激痛にのたうち回る肉体にとっては、麻薬
のようなものだった。

痛みを快楽と脳が誤認識し始め、射精され
るたびに絶頂を迎えるようになると、もう
歯止めがかからなくなり、バッドエンドビ
ューティは、快楽に身を震わせ泣き叫んだ。

そして今、肛門から噴き上げる精液とともに
に敗北宣言をさせられたのだった。





「なんで！なんで！なんで！こんなこと！？」

最後はバッドエンドハッピーだ。それまで仲間が罵られ、封じられる様を見ていたバッドエンドハッピーは、既に半狂乱になり、泣き叫んでいた。

確かコイツは、他人の不幸が楽しいとか思うタイプだったはずだが……。嘆いているのは仲間の末路か……。自分の運命か……。

まあ、どちらでもいいことだ。闇キユアにかける情けなど無いのだから。

「やだ！やだあッ！膣内に射精さないでッ」

泣き喚くバッドエンドハッピー。
その恐怖に怯えた顔は、まるで人間のようだ。

今まで散々に仲間たちが、俺に犯され、捌られ、
封印される様を見続けてきたのだ。

自分の股間の肉裂に、黒々とした長槍が突き
立ったいま、遂にこの時が来たと絶望するの
はわかる。

だがお前たちが、今まで人々の明日への希望
をどれだけ奪い続けてきたと思ってる。

今度は、貴様達の未来を絶望で黒く染め上げ
てやろう。





「ビィッ!やめて!やめて!やめてエッ!」

俺は、バッドエンドハッピーを駈る。

闇キユア達が、多くの人々にどれだけの絶望や恐怖を与えてきたことか。こいつら自身にも、少しは思い知ってもらわねばと考え直したのだ。

俺は、わざとらしく独り言をつぶやく。

既に四人も相手にしてきたから、精液もそろそろ打ち止めだとか。子宮に射精されなければ孕まずに済むとか。

それを聞いたバッドエンドハッピーは、早々に射精させようと必死に俺に媚びへつらい、腰を懸命に動かじ始めた。

俺は内心笑いながら、それにつきあう。

そして如何にも、もう射精するという演技をしてバッドエンドハッピーが、ほっとした表情を浮かべた瞬間に

一際強く腰を打ちつけ、子宮口をぶちぬいた。

愕然とするバッドエンドハッピーの顔を眺めながら、俺は射精する。



「んぎらッ！痛い！イッ！イッ！」

子宮に広がる熱い感覚、膨れ上がる下腹、体中から抜けていく闇のエネルギー。

バッドエンドハッピーの顔は「絶望」という言葉そのものだった。

だが、これで終わりではない。

俺は、拳をバッドエンドハッピーの肉裂にめりこませ、再度、子宮口をこじ開ける。

激痛に泣き叫ぶバッドエンドハッピーの啼き声が心地いい。

俺は、胎内からエネルギーコアを引き抜くと高々と掲げたのだった。



「アツッ……ウツッ……あうッッ！」

バッドエンドハッピーは、完全に戦意を喪失したようではあったが、念のために他の四人同様に尻穴を犯し、体力を奪っておく。

うむ、仲間ハズレはよくない。

もはや抵抗する気も失せたようで、体内に浄化エネルギーを流しこまれても、時折ビクンビクンと痙攣し、呻き声を漏らすくらいしか反応がない。

こうなると、どこまで犯すべきか判断しづらく、少々困ったことになった。

「ああ……」

とりあえず「こんなものか」という程度に、
バッドエンドハッピーの尻穴を犯すと
長槍を肛門から引き抜いた。

極太の肉棒から解放された肛門は、すぐ
さま閉じることもできず、腹にたっぷりと
流し込まれた精液を浄化エネルギーの
残滓を撒き散らしながら噴き出す。

バッドエンドハッピーは、虚ろな目で
ただそれを見つめるだけだ。



「あがッ！アアッ！」

しかし、どうも怪しい。

バッドエンドプリキュア達は、素直に討伐されるようなタマではないのは、よくわかつている。

リーダーたるバッドエンドハッピーが、この程度で屈服するものだろうか？

しかし人数の多いこいつらに、あまり時間をかけているわけにもいかない。

悩んだ末に思いついたのは、プリキュアならではの
方法だった。

取り込んだバッドエンドプリキュアの力を使い、
プリンセスキャンドルを具現化するとそれを
バッドエンドハッピーの尻穴に突っ込んだ。



「ヒイツー！アツアツアツ！」
「ぬ、抜いてえ……」
「た、助けて……」
「も、もうイキたくない……」

鏡の中では、バッドエンドプリキュア達が、時折体を震わせ、悲鳴や哀願の呻き声をあげている。尻穴に差し込まれたプリンセスキャンデルが、微量な浄化エネルギーを放出し続けているのだ。これで、俺がつきつきりでなくとも、コイツらが何かをしでかすこともあるまい。

お前たちは、この先ずっと悶え苦しむがいい。

——バッドエンドプリキュア討伐完了





To Be Continued

「おい貴様。私とセックスしろ」

油断していたとは思えないのだが、完全に後れを取った。
突然、俺は吹き飛ばされた。
倒れた俺の上にとすと誰かが乗ってくる。

俺はそれを見上げて愕然とした。

ダークプリキュア。

最強にして最恐、最凶の闇キュア。
やべ、俺死んだわ。

だが、その口から出たセリフに俺は間抜けな声で答える。

「はい？」